加藤周一の死生観の相貌

小関　素明

(1)「到来する死」と「殺される死」

加藤周一が自身の生と死について直接触れた文章はあまり多くない。ただ『羊の歌』（岩波新書、1968年）にはそれをうかがい知ることができる記述が数カ所含まれている。

第一には、大学入学直後に湿性肋膜炎を患い、「一時生死の境を彷徨」した後、ようやく回復の兆しがみえた時に去来した心境を以下のように語っている箇所である。

> 生きていることは、それだけで、貴重なことのように思われ、傍からみればとるにも足らぬ小さなことが、私には、世界中の何ものにも換え難いよろこびになった。一杯の熱い番茶、古い本の紙の匂い、階下の母と妹の話し声、聞き覚えのあるいくつかの旋律、冬の午後の澄んで明るい陽ざし、しずかに流れてゆく時間の感覚……そのとき、「死」とは、そのよろこびを私から奪うものに他ならなかった。私は自分の痩せた手肢をみつめ、それが焼けて跡かたもなくなるだろうということ、またその手肢を見つめている意識そのものが消えてなくなるだろうということを想像し、そうならざるをえないように出来上がっている世界の秩序そのものを、憎悪した。それは悪であり、不正であり、醜悪な不合理である。熱にうなされた子供の私が、悪夢のなかで巨大な渦にまきこまれ、無限に深く吸いこま

れていったときの、あの息のとまるような恐怖を私は想い出し、「神」を信じてはいなかったが、たとえ神があるとしても、それが正義の神であることはできない、と考えた。世界はつくられたのかもしれないが、やがてほろびなければならないようにしかつくられていない。「めぐみ」はあたえられたのかもしれないが、やがて奪われるようにしかあたえられていない。すべての存在が死に到るのは、世界の内側の構造のためであって、世界の外側からの「審判」の介入によるのではない。一度それを創ってしまった以上、ただ一つの野の花をふみにじるために、創造者自身といえども、正当な理由を見出すことはできないだろう。必ずしもすべての存在が善ではない。しかしどれほど小さな存在の値うちも測り知れないのであるから、存在を破壊する者は、悪でなければならない……（同書 188～189 頁）

この箇所は加藤の感性だけでなく、人間の存在をどう認識するかについて重要な示唆を含んでいる。だが、これは少し事後的な記述である気配が濃厚である。死の可能性が現実に迫ってくると普段あまり意識しなかったあらゆるものが愛おしく思えるというのは、死に直面すれば誰もが経験する自然な感覚変化である。しかしその直後に「『死』とは、そのよろこびを私から奪うもの」という悲歎にくれるというのは、奇異な感がする。なぜなら、死に直面した人間は、まず死が自分の生を暴力的に切断することへの言いようのない悲歎があり、その悲歎のなかでこそ、あらゆるものを愛おしく感じるのである。さらに言えば、その愛おしさは不条理に到来する死への憤りをわずかばかり和らげてくれる日だまりのようなものとして感じるのが自然な意識の推移である。

おそらく加藤のこの二つの感覚もそうした順路で去来したと思われるが、それを事後的に記した場合、こうした記述形式の方が死の不条理性を表現しやすかったのであろう。

しかも、死によって自身の肉体と精神（存在）が消滅することを想像して「そうならざるをえないように出来上がっている世界の秩序そのものを、憎悪」するというのは、死の不条理性に対する名状しがたい憤りを事後的に言葉にしたものであろう。そこから神や正義の存在への懐疑……と記述はつづくが、加藤が表現したかったことを乱暴にまとめれば、死とは何の応報でもなければ甘受しなければならない審判でもないという意味において一切の必然として受けとめられないということにつきよう。にもかかわらず、死は厳然と到来する。そうであればこそ、その不条理を「そうならざるをえないように出来上がっている世界の秩序そのもの」として慷慨して見せ、その捉えようのない恐怖を表現しようとしたのである。死の恐怖を、幼少期の悪夢のなかでの「巨大な渦にまきこまれ、無限に深く吸いこまれていったときの、あの息のとまるような恐怖」にたとえたのはそのためである。しかし、これも事後の説明的記述の感が強い。

次の東京大空襲の際の爆撃が身近に迫った時の記述も上記の点と符合する。

> 大学が焼夷弾を免れたとしても周囲を火にとりまかれれば、おそらく生きのびることはむずかしかろう、と私は考えた。何をなすべきか。できることは何もない。私は母と妹のことを考えた。世田谷の家は郊外だから、おそらく安全だろう。私はまた、このまま死ぬとしたら、私の死は何という馬鹿げたものか、ということも考えた。誰を怨むというのでもなく、戦争を呪うというのでさえもない。ただこの状況――生きるも死ぬも、要するに米国人が、太平洋の島ですでに決めてしまった計画次第であり、ただ私がその計画を知らぬだけだという状況そのものが、実に馬鹿げていて、腹立たしかった」（同書 209～210 頁）。

「誰を怨むというのでもなく、戦争を呪うというのでさえもない」。では何を怨み、呪うのか。何も、誰も怨みはしないし、呪いもしない、というよりできない。なぜなら、怨み呪う対象は実体的なものとしては存在しないからである。あくまで加藤が苛まれたのは、「ただ私がその〔米国の―引用者〕計画を知らぬだけだという状況そのもの」への腹立たしさであった。それはまさに憎悪を向ける照準を定めることすらできない力によって自身の死が強要されることへの憤りという点で、先の引用に示された感覚と通底する。この二つの引用に共通するのは、死の接近のなかで自身の存在のかけがえのなさと、それを機械的に絶ってしまう死への憤りである。

ただ、この二つの引用の間には違いもある。最初の引用の前半は、死そのものへの恐怖であり、後半はそうした死をもたらすものへの憤りである。いわば自身にとって自らの死はかけがえのない存在の喪失であり消滅であるが、大きな状況のなかではそれは単なる事象にすぎない。加藤はこの落差に対するやり場のない憤りに煩悶していたといえよう。この煩悶は第二の引用でより鮮明に述べられている。そこでは自身に向けられた「敵意」に殺されるのではなく、自身の存在に頓着することさえない強大な力に消去されることへの憤り、つまりかけがえのない自身の存在が、自身があずかり知らない海の彼方の策謀によっていとも簡単に消去されるということへの慷慨が分析的に述べられていることが見てとれる。

米国を交戦国として敵意を向ける対象ではなく、むしろ自身を消去する抗えない強大な抽象的力として受感するこの感覚は、戦争に対する普遍的な批判の可能性をわれわれに開示する。この戦争の普遍的な不条理性への慷慨は、自身の死を対象化できない懊悩に惹起されている面が大きい。この自身の死を明確に対象化できないという不安こそ、普遍的な戦争批判の原資である。

この点は、以下にみる友人の死に直面した想いの描写と比べてみれば明らかである。

> 中西〔中西哲吉。加藤の第一高等学校の後輩でマチネ・ポエティクの同人—引用者〕は死んでしまった。太平洋戦争のいくさの全体のなかで、私にはどうしても承認できないことは、あれほど生きることを願っていた男が殺されたということである。〔中略〕一人の友人の生命にくらべれば、太平洋の島の全部に何の価値があるだろうか。私は油の浮いた南の海を見た。彼の眼が最後に見たでもあろう青い空と太陽を想像した。彼は最後に妹の顔を想いうかべたのかもしれないし、母親の顔を想いうかべたのかもしれない。愛したかもしれない女、やりとげたかもしれない仕事、読んだかもしれない詩句、聞いたかもしれない音楽……彼はまだ生きはじめたばかりで、もっと生きようと願っていたのだ。みずから進んで死地に赴いたのでも、「だまされて」死を択んだのでさえもない。遂に彼をだますことのできなかった権力が、物理的な力で彼を死地に強制したのである。私は中西の死を知ったときに、しばらく茫然としていたが、我にかえると、悲しみではなくて、抑え難い怒りを感じた。太平洋戦争のすべてを許しても、中西の死を私が許すことはないだろうと思う。それはとりかえしのつかない罪であり、罪は償われなければならない。……（同書 198～199 頁）

ここでの中西の現実的な死は「『だまされて』死を択んだのでさえもな」く、「遂に彼をだますことのできなかった権力が、物理的な力で彼を死地に強制した」点で、前出の引用における加藤の仮想死以上に彼方の強権力によって強いられた不条理な死として捉えられている。大きな相違は、加藤の死が「到来する死（消滅）」であったのに対して、中西の死

は敵国の策動によって「殺された死」として捉えられていることである。ために、悲歎の対象ではあっても、自身の死に感じた「巨大な渦にまきこまれ、無限に深く吸いこまれて」いくようなとらえどころの無い不安はここにはない。死を強いる主体が敵国の物理的力と明確に対象化されている以上、中西の死は具体的な殺戮であり、ゆえに憎悪を向けるべき対象も明確である。そのかぎりで中西の死は個別的死として閉じてとらえられている。ここから戦争の惨苦は強烈に実感できても普遍的な戦争批判は生まれにくい。

ただうがった見方をすれば、ここには最愛の友人の具体的な死に極限まで同化し、その死をもたらした力を対象化し憤ることで、自身を追い込んだとらえどころのない死の不気味さから逃れたいという衝動が加藤の心底に暗黙裡に働いているともいえなくはない。

だが、加藤は中西の死に極限まで同化してもなお自身の死を完全に対象化することはできなかったように思われる。逆に加藤は、親密な友人の死に直面し、それを経由することによって、かえって自身の死それ自身を意識化することの原理的な不可能性を悟らざるを得なかったのではなかろうか。

(2)「文化」としての死者の弔い

以上の点と符合するかのように、加藤は死自身を論じることを以後の著作において断念したかのようにもみえる。例えば、「死の見方・江戸時代と近代」(『文学』1972年3月〈岩波書店〉、『加藤周一著作集』3、平凡社、1978年所収)に死に関する記述があるが、それは死者の弔いの意味をいかに捉えるかという問題にすぎず、死の恐怖の問題とは次元の違うものとなっている。

加藤はその「追記」で次のように述べている。

私は日本の作家や思想家たちの著作を読んでいるうちに、彼らが自己の死をどう見ていたかということに、次第に興味を覚えるようになった。例外を除けば、彼らの死の見方には一種の共通点があり、その共通点は日本の文化の構造を反映しているように、私には思われた（同前 385 頁）。

多くの作家や思想家の死の見方に「一種の共通点」があり、それは「日本文化の構造」を反映しているとあるが、はたしてどこに「日本文化の構造」が反映されていると加藤は考えていたのであろうか。上記の引用の前段で加藤は以下のように述べている。

死を怖れるのは、人間の「自然」である。死の怖れを克服するのは、人間の「文化」である。それぞれの文化には、死を超越するための独特の方式（必ずしも宗教でなく、必ずしも体系的イデオロギーではない）がある。その方式において、江戸文化は近代日本の文化に連る。一七世紀から今日まで、その基本的な一点においては、ただ一つの文化があった、といえるだろうと思う（同前 385 頁）。

これによって加藤は、死の怖れを前にした人間が共通して編み出してきた「死を超越するための独特の方式」のなかに「日本文化の構造」が反映されており、17 世紀から今日まで基本的には変わらないと見なしていることがおおよそ理解できる。

では加藤のいわんとする「日本文化の構造」が反映された「死を超越するための独特の方法」とは何か。これに関して加藤は詳しくは述べていないが、以下の叙述は加藤のいわんとしているところを示唆している。

死と死者に対する考えの象徴的要約として、葬式のやり方は、死

の形而上学的解釈を示すばかりでなく、死者と共同体の関係（あるいは死の私的性格の度合い）を、示すだろう。しかも葬式のやり方は、歴史的時代についても知ることができる。徳川時代の後半に狂歌師たちの残した「辞世」は、町人文化のなかでの、死に対する世俗的な態度の徹底とその表現の知的洗煉を証言している。これは朱子学的形而上学と全く性質のちがう死の見方であり、詳細な検討に値すると思う（同前 386 頁）。

ここで加藤は葬式と狂歌師たちの「辞世」をあげている。たしかに葬式（死者への弔い）の方法は「死と死者に対する考えの象徴的要約」であり、「死者と共同体の関係（あるいは死の私的性格の度合い）を、示す」というのはその通りであろう。ここで加藤が葬式の方法に「日本文化の構造」が反映しているといった含意が明らかになる。すなわち加藤が日本の死者の弔い方の特質として着目しているのは、共同体との濃密な関係性の投影であり、そこに加藤は「日本文化の構造」との照応関係を見越しているのである。

(3) 死そのものを語ることへの諦観

共同体との関係が投影されるかぎり、それは死者に対する公的意味合いを帯びた儀礼的処遇、いわば弔いの習俗とならざるを得ない。いうまでもなく、弔いの態度を掘り下げても死そのものは語れない。これは加藤のつとに自覚するところであり、「死に対する社会（と文化）の態度について語ることには意味があり、死そのものについて語ることには意味がない」（同前 387 頁）という加藤の言辞はそれを示している。

自身の死が明確に対象化できないかぎり「死への怖れ」を克服する万人に有効な処方は語りようがないという諦観に行きつくのはけだし必然

であった。特定の個人にとっての死の意味は、万人にとっての意味ではない。加藤が死を特定の個人が「語ることには意味がない」と放下してみせざるを得なかった理由はここにあったのではかなろうか。

加藤が死の直前に洗礼を受け、柩のなかに『論語』とともに『聖書』を入れることを所望したのは、何人もその真意をうかがい知ることができない振る舞いではなかろうか。

（おぜき もとあき　加藤周一現代思想研究副センター長）